

ひょうご 水百景

No.223 揖保川・十二ン波（宍粟市）

～筏流しの難所を越えて奥宍粟の木材を運ぶ～



写真-1 河東大橋から揖保川「十二ン波」を撮影（令和5年7月）

■ 筏流しの難所～十二ン波

写真-1 は、宍粟（しろう）市山崎町を流れる一級河川・揖保川に架かる市道河東大橋線・河東大橋（かわひがしおおはし：L=152.80m）から名勝「十二ン波（じゅうにんなみ）」を撮ったもので、河床に露岩が点在し流れが速いことから、昔は筏流しの難所の一つでした。一番瀬と呼ばれる激流に始まり、二番瀬、三番瀬、夫婦岩、洗濯岩、男岩と続いていくそうです。

前方に見える橋は、一般県道 537 号田井中広瀬（たいなかひろせ）線の宍粟橋で、その右手の建物が宍粟市役所です。宍粟橋の上流には、かつて揖保川を行き来した高瀬舟の起点・出石（いだし）の船着場があり、今も舟が停泊した石張りの突堤が残っています。

下の2枚の写真-2・3は、十二ン波の昔と今を比較するため、ほぼ同じアングルで撮ったものです。

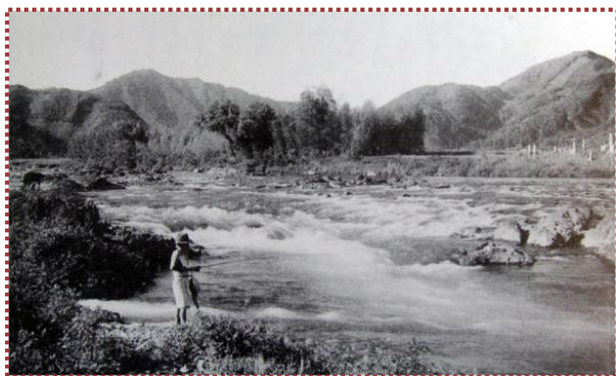


写真-2 揖保川十二ン波・一番瀬の激流（宍粟市教育委員会提供）



写真-3 左と同じアングルで撮った今の十二ン波（令和7年5月撮影）

■ 「十二波」周辺地域の地形・地質について

十二波の約 1.2km 南を走る中国自動車道に沿って、全長約 80km に及び活断層・山崎断層系が走っています。この断層系は、岡山県津山盆地の北にそびえる那岐山の北側から、岡山県大原町を経て兵庫県佐用町に入り、宍粟市山崎町・姫路市安富町から福崎町に至り、さらに加西市を経て小野市・三木市へと延びる左横ずれの活断層とされています。

『兵庫の地質（地質編）』によると、この断層系はいくつかの雁行するセグメント※1 からなり、各々のセグメントについては、大原断層（確実度※2Ⅰ）、土万（ひじま）断層（確実度Ⅰ）、暮坂峠断層（確実度Ⅱ）、安富断層（確実度Ⅰ）と名付けられ、さらに東方は、琵琶甲断層（確実度Ⅰ）、三木断層（確実度Ⅱ）と呼ばれています。そして、十二波付近を通っているのは図-1 からわかるように大原断層です。

大原断層は、長さ 34km で山地斜面の高度不連続から断層の北側隆起量 200m、谷や尾根の屈曲から左横ずれ変位量 400m とされています。この断層が揖保川を横切る宍粟市山崎町今宿地区には、断層運動により盛り上がった岩塊が洗い出されてきた多くの奇岩からなる名勝「十二波」があり、清流が岩に当たって白いしぶきをあげる景観は有名です。

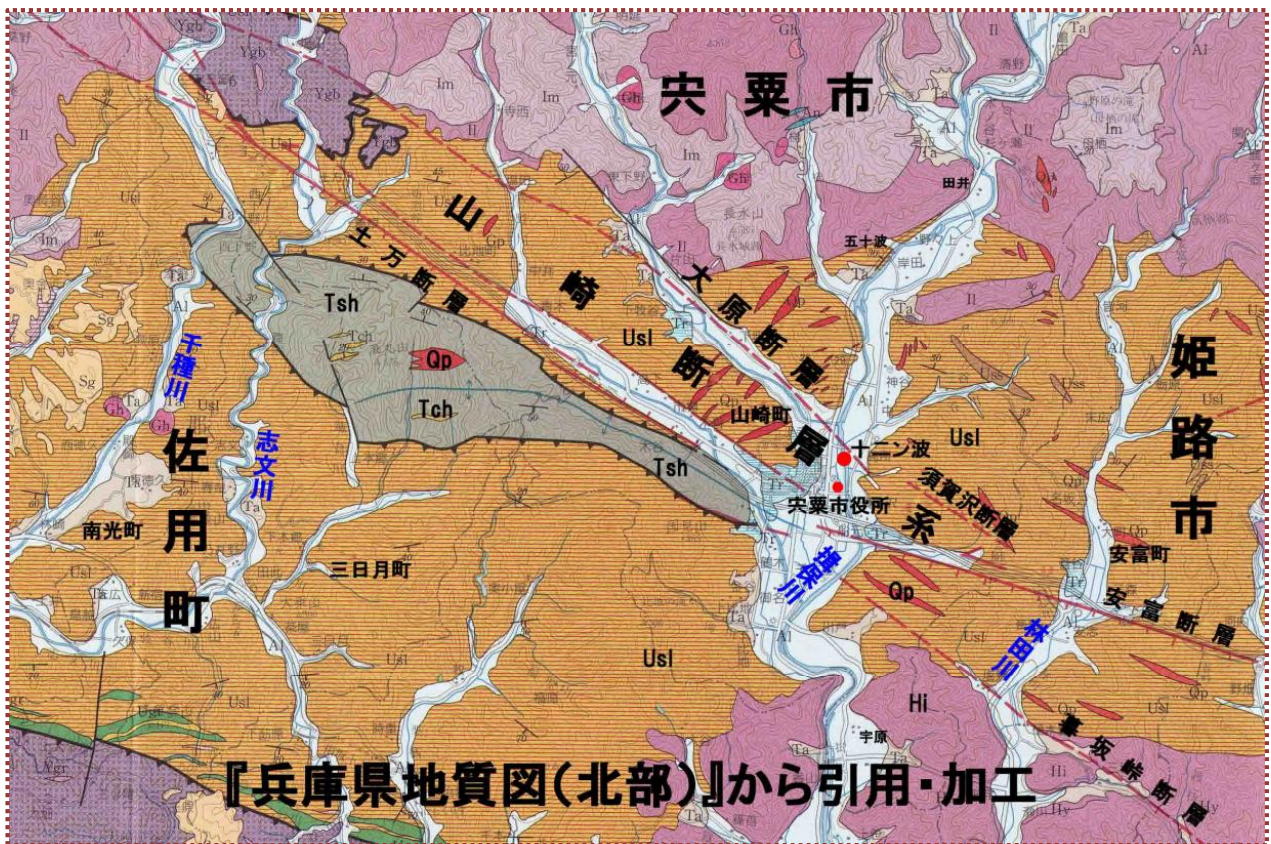


図-1 大原断層周辺の地質図

凡 例

Us1: 超丹波帯地層群 粘板岩、頁岩、頁岩・砂岩互層、混在岩	Tch: 丹波層群 チャート、チャート優勢岩
Tsh: 丹波層群 頁岩、頁岩・砂岩互層、混在岩	Qp: 岩脈類（石英斑岩）
HI: 相生層群・伊勢累層 ガラス質～流紋岩質多結晶溶結凝灰岩	

また、安富断層のトレンチ調査結果から、最新の地震活動として貞観 10（868）年の播磨地震（M7.0 以上）の可能性が大きいとし、活動間隔は数千年程度とみなされています。

このうち、暮坂峠断層は「安富断層のような明瞭な地形のずれが認められず、第四紀の後半には活動していなかったと考えられていましたが、昭和 59（1984）年 5 月 30 日に M5.6 の地震が発生したことから、この断層が活動能力を有していたことが証明されたわけで、将来も注意が肝要である」と『安富町史通史編』に記されています。

※1 セグメント：長大な活断層系を分割する場合の用語として使われ、分離された活断層の断片のこと。

※2 確実度：活断層とは、最近の地質時代に繰り返し活動し、将来も活動することが推定される断層のことであるが、その存在は、空中写真判読により認定されることが多いが、写真判読だけでは活断層であるかどうか、はっきりしないことがある。そのような場合には、それが活断層であることの確かさを、確実度によって示す。活断層の確実度は、次の三つに分類される。

確実度Ⅰ：断層の位置・ずれの向きがともに明確で、地形的特徴から活断層であることが確実なもの。

確実度Ⅱ：断層の位置・ずれの向きは推定できるが、地形やごく新しい時代の地層が繰り返しずれていることを示す確実な証拠に欠けるなど、確実度Ⅰとするには十分な資料に欠けるもの。

確実度Ⅲ：活断層である可能性はあるがずれの向きが不明であるなど、河川や海の侵食作用など他の原因で形成された疑いが残るもの。

■ 奥穴栗の木材を筏流して運ぶ

穴栗郡（5 町：山崎町・安富町・一宮町・波賀町・千種町）は豊かな森林資源に恵まれ、大正 12（1923）年に発行された『兵庫縣穴栗郡誌』に「林業は本郡の生命なり。全地積の 9 割は森林で、林業労働による所得も亦甚大なり。」と記されているとおり、「穴栗スギ」を中心とする有数の素材生産地であり、林業を中心に栄えてきた地域でした。

平成 17（2005）年 4 月 1 日に、穴栗郡の 4 町（山崎町・一宮町・波賀町・千種町）が合併して「穴栗市」となりましたが、特に旧波賀町は、江戸時代には森林地帯の多くが天領とされ、大正時代から昭和時代には森林鉄道が敷かれ多くの木材を市場に供給してきました。

明治・大正年間には、揖保川上流の引原川では上野（現・穴栗市波賀町）から、三方川（揖保川）では一宮町三方（現・穴栗市一宮町）から、伐採された原木を筏に組んで揖保川河口近くの網干港に下る輸送が盛んでした。

その方法は、揖保川上流で幅 3 尺（≒90cm）ぐらいに組んだ筏「一流し」を 3 人で操って山崎町（現・穴栗市山崎町）出石まで下ります。十二波の激流を下った筏は、緩やかな流れに乗って、ダンガメ岩と呼ばれる大きな岩の上下流に着岸し、筏はここで「二流し」を横に合わせて再編されます。

筏師は、東出石内の二軒の旅館で一泊し、翌朝一人で龍野まで筏を流し、ここで乗員が交代して網干に下ったそうです。

しかし、この筏流しも陸上交通の発達に伴って次第に衰微し、昭和 5（1930）年頃にはほとんど姿を見ることはなくなりました。



図-2 十二波周辺の地図

右の写真-4 は、大正 10 (1921) 年頃に揖保川左岸から穴栗橋を撮ったものです。出石の左岸側の船着場には、出発を待つ二流しの筏が写っています。下流側の筏には、3 人の筏師が乗っているのが見えます。

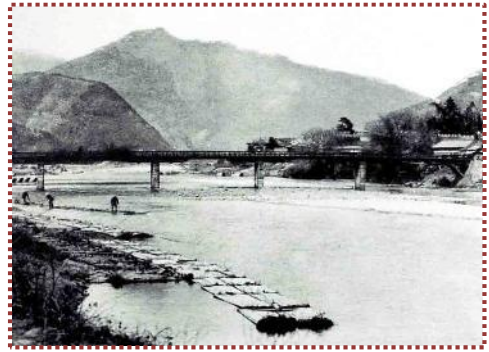


写真-4 大正 10 年頃の穴栗橋と出石河岸

■ 子供たちが怖がった「ダンガメ岩」

ダンガメとは、この岩周辺に生息する年若いはいるが恐ろしいスッポンのことで、子供の足に食いつき、食いつくと雷が鳴らないかぎり離しません。

ダンガメ岩は十二ン波を下って流れが緩やかになった所にある岩です。子供たちは泳いでその岩に渡るのですが、ダンガメの話を知っているのか、怖くてなかなか流れに飛び込めず、躊躇していると、結局後ろから押されて飛び込むことに。

現地でそれらしき岩を探してみましたが、恐らく写真-5 の釣り師の向うに見える岩と思われます。小さいと思われるかもしれませんが、子供たちにとっては十分に大きく、岸辺の岩とダンガメ岩の間の淵は、子供たちがビビるには十分な深さがあります。

ダンガメ岩周辺には、あぶらげ岩や軍艦岩といった名の付いた岩もあるとか。多分上流に見える岩がそれと思われます。



写真-5 釣り師の向うに見えるのがダンガメ岩 (多分)

■ モノローグ

本稿を執筆中もずっと気になっていた「十二ン波」の由来は、いろいろ調べてみましたが結局わからずじまいです。

河東大橋の約 3km 上流にある「五十波」という地名は「いかば」と読みます。地名の由来は揖保川の川波が多いことによると考えられていますが、『播磨国風土記』に伊加麻川(イカマガワ)がみえ、イカマがイカバに転訛したとする説もあってはっきりしません。「白髪三千丈」的な発想で単に波の多さを誇張して表現したのであれば「五十」は遠慮し過ぎのように思います。ましてや「十二」は少な過ぎます。

「十二」は何か意味のある数字なのかもしれません。干支は十二支あり、「新約聖書」では 12 人の使徒がいます。新薬師寺には十二神将像があり、1 年は 12 ヶ月、1 日は 24 時間ですが、午前・午後それぞれ 12 時間に分けられています。それに「ン」の存在も気になります。



写真-6 河東大橋から上流の荒井頭首工を撮影



写真-7 揖保川・穴栗市山崎町五十波

ハグロトンボ（羽黒蜻蛉）

カワトンボ科アオハダトンボ属。別名ホソホソトンボ。成虫の体長は57～67mm、後翅長35～44mmほどで、トンボとしてはやや大型。雌の方が雄より若干大きい、大差はない。翅が黒いのが特徴で斑紋はなく、雄は体色が全体的に黒く緑色の金属光沢があるのに対し、雌は黒褐色である。他のトンボのように素早く飛翔したりホバリングしたりせず、チョウのようにひらひらと舞うように羽ばたく。5～10月頃まで見られ、特に7～8月に多い。主に平地から低山地のヨシなどの挺水植物や、エビモ、ハイカモなどの沈水植物などが茂る緩やかな流れに生息する。写真-8は、荒井頭首工近くの右岸堤防上で葉っぱに止まっていたハグロトンボを撮影したもので多分雌。



写真-8 ハグロトンボ（荒井頭首工付近で撮影）

【参考資料】

- 1 『山崎町史』 山崎町史編集委員会 編 昭和52年4月
- 2 『揖保川水系河川整備計画（国管理区間）』 近畿地方整備局 平成25年7月
https://www.kkr.mlit.go.jp/himeji/iin/ibo_ryuiki/pdf_files/ibogawa_seibikeikaku.pdf
- 3 『兵庫の地質』 兵庫県土地質図編纂委員会編 平成9年8月再版
- 4 『山崎断層 その地震と災害』 寺脇弘光 平成9年5月
- 5 『応用地質用語集』 日本応用地質学会 令和元年11月
https://www.jseg.or.jp/pdf/JSEG_yougo.pdf
- 6 『活断層の確実度』 地震調査研究推進本部 HP
<https://www.jishin.go.jp/main/yogo/b.htm>
- 7 『大原断層地表地質調査結果』 地震調査研究推進本部事業報告書 平成7年度
<https://www.hp1039.jishin.go.jp/danso/Okayamafrm.htm>
- 8 『しそ森林王国の魅力、しそ森林王国とは』 しそ森林王国観光協会 HP
<https://shiso.or.jp/attraction> <https://shiso.or.jp/attraction#attraction04>
- 9 『出石浜史 2～愛宕山とその楚「古町」』 下村哲三 平成11年12月
- 10 『日本歴史地名大系 29 兵庫県の地名Ⅱ～五十波村』 今井林太郎 平凡社 平成11年10月
- 11 『水運物語 1「出石の河岸」』 郷土の歴史と古城巡りブログ 令和元年11月
<https://blog.goo.ne.jp/takenet5177/e/e3f6e79a4f9653ab4d64a20eb393c196>
- 12 『夏の風物詩「十二波の鮎釣り」』 郷土の歴史と古城巡りブログ 令和元年10月
<https://blog.goo.ne.jp/takenet5177/d/20191026>
- 13 『ハグロトンボ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和7（2025）年6月 『ひょうご水百景』 No.223

改訂：令和8（2026）年8月 『ひょうご水百景』 No.223